

昭道報

Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

第12号
平成16年3月6日発行

<発行所>
関西合気道競技連盟広報部
<発行責任者>
中村芳勝(広報部長)
<編集>
昭道報編集係

第二十八回関西合気道競技大会

二〇〇三年十一月二十三日、大阪市立阿倍野スポーツセンターにて第二十八回関西合気道競技大会が開催されました。今回から少年部は別の日に行われることになりましたが、それでもエントリ―選手は二〇〇名を越える大きな大会となりました。

関西合気道競技大会感想

昭道館館長 富木昌子

本大会は昭道館と共にその歴史を積み重ねてきた大会であると承っており、今回初めて出席させて頂いたことをたいへん嬉しく思っております。(昨年はどうしても都合がつかずたいへん残念に思っておりました。)

学生、社会人が入り混じり、師弟対決もあり、厳しくも和気あいあいとした雰囲気を持つ貴重な大会であると感じました。それは昭道館の持ち味でもあると思います。期待に違わぬ試合を拝見し、一日があつたという間に過ぎた感じでした。

また、試合後の表彰式・懇親会は一年の稽古を振り返り、お互いの健闘を称え合う機会として素晴らしい時間が用意されていると感じました。私も若い選手の方々と語り合うことができ、合気道についての思いを直接聞くことができたことは、とても嬉しいことでした。

参加選手、指導者の皆さま、また大会運営の裏方を務められた皆さま本当にご苦労さまでした。

二〇〇三年の大会が終わり、目標

関西社会人大会印象記

J A A 事務局長 小松正治

日本合気道協会(J A A)はちつとも発展しないマイナーな団体だと嘆息する人々が多いが、そのような意見の人に、私は着実に発展していることをムキになって反論して

を達成した者、及ばなかった者、それぞれに、また新しい年への抱負を胸にしていることでしょうか。どうぞ今年も倦まず弛まず、稽古に精進されることを願っております。

(開会式ご挨拶より)

去る二〇〇三年九月十三日に秋田県角館町において富木謙治顕彰碑の除幕式が行われました。地元合気道角館協会のご提案から二年、全国の日本合気道協会会員の皆様から頂いたご寄付とご尽力によって実現致しました。ご協力頂きました皆様に、この場をお借りしてあらためて厚くお礼申し上げます。またご多忙の中、遠路関西からも多くのご参列を頂きました。重ねて深くお礼申し上げます。



います。私は協会が公式競技大会を開催してからはほとんど大会に参加していません。大会の充実と発展が遅々としていようと発展している構造が骨太であり、進化の芽が現れている現場を、そのような方々に一生懸命説明しています。

今回の大会は、関東から参加した選手も一試合だけでなく何試合か競技を楽しめるように工夫されました。こうしたうれしい配慮は長く運営に携わられた方々のスキルの賜物と言えるでしょう。

それぞれの競技種目についての感想は紙面的及び時間的全てを見ることが不可能に難しいので、男子短刀乱取り競技について印象的な点を述べますと、優勝したキロン選手のパワーは、十分に日本の技術を習得したことに由来しています。今年度の関東社会人大会の準優勝者昨年度

三位)も、関西で基本技術を学び、関東で様々な社会人クラブで乱取りの技術を習得し、レベルアップを実現しています。この二人の海外の選手が東西の大会で活躍できるようになったことも、進歩の現れと言えるでしょう。二人の対決も興味深いものがあります。いずれ、対戦の機会もあるのではと期待しています。

ここで選手全体の技術的な課題を、元選手として、トレーナーとして述べてみます。先の当身で、目のさめるような正面当てが見られなかったことを上げておきましょう。関節技の優れた技術に比較して当身技を仕掛けた選手が少ないように思えました。

次に演武競技はさすがに、中央道場としての求心力のもとに高水準の対決が相次いでいました。これは、私見ですがあくまで参考意見としての見解ですが、昇段審査会と異なり、もう少し表現の多様性があるのもよいのではないのでしょうか。もう少し具体的に言えば、ある局面を想定しての技に工夫を凝らしてはどうでしょうか。もちろん、難しいことを承知で述べています。統一技法の浸透のうえでの、創造性の発露が演武競技の定義と考えています。

また、トーナメント制は印象度に判定が傾くくらいがあります。この点を踏まえた審判技術をどのように訓練するかが、今後の課題です。審判技術については元審判部長として述べておきます。関西・関東とも同じ問題点を抱えています。突き

初めての関西大会

昭道館武蔵野 永井仁高

す。まず審判は自分の基準をコロコロ変えないことです。ある人の突きはとつて、別の人の突きは同じ真ん中に入っているのにならぬ状況があつてはなりません。技術以前に公平性の点からの基本です。また、自分から見えない位置の技に判定を下すのも、基本を逸脱した行為と言えます。以上の注意点は、我々審判員の方針であるべきでしょう。

大会に関するさまざまな反省点を次回大会に確実にいかしてこそ、冒頭の「協会は発展しているではないか」のプライドの実証となります。次回大会の進化を期待いたします。

久々のエントリー

昭道館武蔵野 佐藤竜一

指導員という立場もあり、ここ最近試合に出場することを控えていましたが、今回二年ぶりに乱取競技個人戦に参加しました。参加を決めた理由は二つあり、一つは基本の大切さを武蔵野のメンバーに伝えようと思つたからです。昭道館武蔵野を立ち上げて三年半になりますが、今回の関西合気道競技大会に十七名の会員が参加してくれました。普段武蔵野の稽古では基本練習の大切さを口煩く説いていますので、事実上の全日本ともいえる実力者揃いの植木杯で、姿勢、間合い、目付け、勝機、統一力等の基本練習の大切さを実際に見せること

私が昭道館武蔵野に入門して一年、今回初めての関西大会参加でした。演武から乱取り、個人戦から団体戦、さらに成山師範演武とフルコースをじっくり堪能いたしました。特に私たち武蔵野の

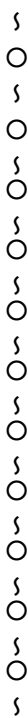


が出来れば良いと思ひ参加を決めました。勝ち負けにはそれほど拘つてはいなかつたのですが、勝てばより多くの試合を見せることが出来まふし、また勝利を挙げることにより説得力も増すと思ひ、一戦一戦を大事に戦いました。武蔵野のメンバーに限らず、基本の大切さ、または試合のどういった箇所が基本の技術が活かされているのか等、少しでも理解して頂けた人がいたなら幸いです。ただ、試合中に怪我をしてしまったことは誤算でした。社会人にとつて怪我は最大の敵ですので、皆が恐怖心を持たないでくれることを祈ります。

もう一つの参加理由は、日本合気道協会の平成十五年のスロー

佐藤竜一先生の試合は印象深かつたです。ハードな試合をされていても楽しげな表情、さらに途中、足を痛められながらも奮闘された勇姿。すごいものを見せていただいたと、興奮しました。そのまま夜の大会パーティ(会場向こう側が見えない！スゴイ！)に参加し、酒がホロホロと回り始めた頃に、大会の結果発表。なんと初級の演武で優勝をいただき、望外の喜びでした。歌謡大賞を受賞して「本当に私なの？」という顔をして泣き崩れるアイドルだつて「もしかしたら、ウウンたぶん優勝は私かも」と予想していると思ひますが、私は本当に望外だつたのです。

自由演武ということで、演目を自分たちで考えたのですが、私は



ガンが「生涯体育としての合気道」だつたからです。最近、生涯武道について色々と考えているところがありましたので、今回の試合から何かしらの答えを見出すことが出来ればと思ひ参加を決意しました。結局は試合中に自分の伝えたいことや、或いはその信じることを表現することの難しさを実感するばかりで、捜し求めている答えを見つけることは出来ませんでした。ただ、我々の合気道では乱取競技に比重を置いている人が多いので、元気いっばいの若者に混じつて勝つたことには意味があつたように思ひます。

ところで、最近選手として大会に参加すると自分の教え子と

六級、パートナーの清水さんも八級で、できることは限られていません。それでも「やっぱ一回ぐらい勝ちたい」という色気を押さえきれず、初めは何となく見栄えがよさそうなものを演目に入れていたのですが、佐藤先生のアドバイスで、八級、七級のシンプルな技を中心に組み立て直し、大会に臨んだのです。

本番では初級の部の皆さんが、私には名前もわからない難しそうな技を取り入れた演武をされていたので、正直「こりゃあかん」と思ひました。ですから優勝と聞いたときは嬉しい反面、「なぜ私たちが？」とも思つたのです。なぜ勝てたかわからない、ということとは、やはりまだ見えていないものがたくさんあるからだと思ひ

戦う機会が多くなりました。合気道競技では、技術・体力・精神力・運が勝敗を左右しますが、特に体力の占める比重が大きいトーナメントにおいては若者の方が断然有利です。是非ベテランと呼ばれる人たちを踏み台にしていてほしいものです。世代交代はそうして生まれるのですから。ただ、私自身は武道家であると思つていふので、何歳になつても誰にも負けない気構えだけは持つていふと思つています。選手として大会に出場するかどうかは別にしまして、これからも常に向上心を持ち、稽古を通して技術を磨き、心を練つていきたいと思つていふます。

ます。

今回は、一つの技の中にも段階があり、自分には見えないものがまだたくさんあること、そして佐藤先生や大森両先生の教えに、見えていない場所への道標があるのだと、つくづく感じました。なぜ「シンプルな技を」とアドバイスされたのか。大会に向けた稽古の中で、自分ではちよつとはできていたつもりの技の中に発見することが本場に多かつたです。稽古で先生方に教えていただき、それを身につけようとしていた内に、少しづつ違う風景の場所に連れて行かれるような感じがしました。混合団体戦で早坂先輩の受けをしていてもそうです。実は「受けだと本番あんまり緊張しないのでいいからちよつとラツキ」といった不心得をしていましたが、稽古していくうちに受けを取ると勉強になるということがわかりかけ、別なラツキを感じました。

先はまだまだ長いでしょうが、少しでもこの道の秘密に迫り、来年は勝因(次は敗因か?)がしつかりわかるようになって、大会に参加したいと思ひます。本場に惜しみなく教えてくださる佐藤先生、大森先生、また諸先輩方には感謝の一言です。また、厳然たる中にも楽しい雰囲気のある大会に盛り上げてくださったすべての方々に御礼申し上げます。これからもどうぞよろしくお願ひします。

第一回関西少年合気道競技大会

二〇〇三年十二月二十三日昭道館本部道場にて第一回関西合気道競技大会が開催されました。関西合気道競技大会から初めて独立開催となった少年部の大会です。

少年大会の開催を

振り返り考えること

昭道館本部 酒井進之介

我々の合気道にとつて大会とはまず競技である。相手がいて、自分がある。勝つこともあれば負けることも多々ある。どちらもいい経験をする事ができるわけだが、やはり負けは悔しい。大会から一ヶ月以上経った今でも「あの時は悔しかった。今年は絶対に勝つてやる」といった言葉も子供達から聞かれる。やはり負けを何度も経験して、そこから勝利を掴んだ時は何物にも替えられない喜びが待っているはずである。そのための努力を通して当然技術のレベルも飛躍的に上がるのではないだろうか。またこういう気持ちだが、子供達を近い将来成人クラスの合気道に繋げる上でも大事な要素となっていくのではないかとと思う。大会や審査や寒稽古など、行事は一つの節目として子供達の技術レベルを上げる上でも大変役に立っていると思われる。また、それを意識させて指導していくことも大切な要素の一つである。

本大会は少年部だけの大会と

しては第一回の大会として開催された。第一回の大会として俯瞰すれば、子供達の参加人数、競技内容、大会運営も含め「成功」と言える大会であったと思う。これも日頃よりご協力いただいている皆様方や少年部指導員の熱意を集めることができた成果であったと思う。更に株式会社大阪日刊スポーツ新聞社とコナミスポーツ株式会社よりご後援、協賛いただいたことは大会を盛り上げる上でも大変効果があった。また他にも数多くの目に見えない無数の励ましの力が本大会を陰に陽に支えていたことを忘れてはならないと思う。

第一回関西少年大会感想

昭道館本部 大西美緒

日頃少年部と接する機会がない私は、どの様なものが見られるか、この大会を楽しみにしていました。子供達ならではの活気を期待していたのですが、始め意外な程静かに競技が行われました。勝手な想像ですが、少年部の子供達は緊張する事などないと思っていました。騒々しいぐらいの元気の良さが見られると思っていたのですが、皆の表情は固くなって

「大会はその一日だけが大会なのではない。それに向け準備を重ね、選手の子供達もご父兄も、そして日頃指導に携わっている者、稽古場所を提供して下さい。集約し、そしてそれが今後の稽古に繋がってゆくようなものになつていくための大会でなければならぬ。」との言葉は、大会開催前に成山師範よりいただいた言葉である。これからも皆様のご協力を仰ぎながら、平成十六年八月の第二回大会に向け、更なる飛躍を目指して邁進してゆくことを指導員の一人として誓いたい。



いました。大会という独特の雰囲気。彼らも感じていたのでしょうか。

その様な中で彼らの動きに驚かされました。特に驚いたのが受身です。受身競争という競技があったのですが、この様な（スピ

大会感想

昭道館本部 萬谷久美子

今大会は、場所の関係上、教室ごとに午前の部と午後の部に分けて実施されました。午前の部はコナミスポーツの各教室で稽古している子ども達が、午後の部はそれ以外の支部・教室で稽古する子ども達が参加しました。

大会を観戦して面白かったのは、同じ少年部の大会でも午前の部と午後の部で雰囲気異なつた点です。午前の部は各教室とも開かれてから年数が浅く、同じレベルの選手が集まつたチームで、とても元気がありました。それに対し、午後の部は上級から初級の選手まで層の厚いチームが多く、なんとなく落ち着いた雰囲気があったのではないかと思っています。

普段は(といつてもごく一部の

ードを競うという要素を含む)競技になるとどうしても形がくずれやすくなります。ですが、どの子も本当に上手かった。競技という緊張した状態であれ程の受身が出来るとい事は、普段からしっかり稽古をしている証拠です。彼らの今後がとても楽しみに思えました。

少年達とすれば違うのですが、上級者はチームの中に入ると風格があつて頼もしい存在でした。年数を重ねることで得られるものがあることを改めて感じる事ができました。コナミスポーツの各教室でも年数を重ね、幅広いレベルの仲間の中で稽古できるようになれば、今以上に何かを学ぶことができる場となるのではないかとと思います。もつともつと長く稽古して、いい先輩になつて欲しいなと思っていました。

大会準備・運営においては各教室の指導員をはじめとする多くの方のご苦労があつたかと思ひますが、参加した子ども達の笑顔を見て「やつてよかった」と思われた方も多かつたのではないのでしょうか。「前回よりもよい大会」を積み重ね、少年達同様、年数を重ねることでもつともつといい大会になればと思います。

子供達より競技に熱くなつていた気はしましたが、それだけ普段から熱心に指導をしているからこそでしょう。指導員が声を出している子ども達の中から少しづつ声援が始め、大会が一気に活気付きました。見たかった大会の形が見られた気がしました。

大勢の方々の試行錯誤の末、今回の大会が行われたのだと思ひます。大会の運営にあまり携わつていない私が言うのもおこがましいのですが、始まりの一步として大変良い大会だったのでないでしょうか。



二〇〇四年度 昭道館寒稽古



二〇〇四年一月十六日から二十五日まで、昭道館本部にて毎年恒例の寒稽古が執り行われました。初めの三日間は少年部で、後の一週間は成人の部。今年は成人の部は朝の部と夜の部に分けて実施されました（夜の部は一般のみ）。いままで仕事や家庭事情で寒稽古に参加できなかった方も、選択の幅が広がったことで参加しやすくなったのではないのでしょうか。

朝の部は一般・学生合わせて百四十一名がエントリーし、平均八十二一名が参加。夜の部は一般のみ四十七名がエントリーし、平均二十六名が参加（いずれも最終日の合同稽古を除く）。皆勤は朝夜合わせて五十一名でした。

夜の部参加者感想

「寒稽古に参加して」

昭道館本部 築島香緒里

寒稽古は通常早朝から行われており、私は仕事の都合上参加が難しく、今回の参加もあきらめかけていました。しかし今年度は夜

朝の部参加者感想

「向き合う」

大阪芸術大学 松本ななみ

「向き合った時が始まり。技の始まりである。相手がかんできた時が始まりでは遅いのだ。腕力に負けてしまう。」

寒稽古が終わり、最初に参加した稽古で成山師範が言われた言葉です。七日間の寒稽古。この言葉が射ていると思います。

朝の部も開講するとのことでしたので、思い切つて参加させて頂くことにしました。

夜の部は各指導員の先生方が一日ずつ担当され、稽古もとても内容の濃いものでした。寒稽古五日目は、受身を中心とした内容でしたが、日ごろの稽古不足を露呈することとなり、とても恥ずかしい思いをしました。しかしながら、審査内容の稽古に力をいれてしまいがちであった自分に気付くことで今後の課題が明確になり、とてもよい機会であったと感じています。

一週間という短い期間ではあったものの、毎日の参加は体力的に少し辛いものがありました。しかしこの寒稽古で大きなものが得られ、また皆勤賞も頂くことができ、とても嬉しく思っています。寒稽古で得られたことを生かし、今後も稽古に励みたいと思います。

「向き合う」とはどういうことか。それは、お互いに「構える」ことだと思えます。どちらか一方だけでは独り善がりになってしまい、それがどんなに素晴らしい行動や想いでも意味を成しません。「相対的關係の中で合理的であったときのみ正しい。」（『合気道教室』一八一頁）まさしくこれだと思えます。返し技が主であった稽古内容は、これを実感させるものでした。

早朝、夜明けと共に始まる寒稽古。参加するには様々な「構え」が必要でした。前の晩は早く寝よう。しつかり食べてから行こう。生活を見直すきつかけになりました。一人で自転車をこいで田ん

ぼ道を抜けるとガタゴトと電車の音。様々な乗客の顔。「昭和町」ちらほらと見かける顔。道場に着くと、シユツシユツシユツと畳をすする音。集まる声。集まる想い、仲間。構えは万全◎

今回の稽古で気付いたのは復習の大切さでした。もう一度再生することにより、自分のものにする、これも道場の先輩方や仲間の協力がなければ不可能でした。習得したいという意欲と態度があればきつといいのです。「主体性でいろいろ価値を生み出す」（『合気道教室』一七七頁）のです。これが「心構え」なのでしょう。昨日できなかったことが今日できる。こんな日が続くといいなと思えました。

寒稽古

寒稽古 朝まだき 来るなり 達すなり 寒稽古 輝かし
霜を踏み行く つめたく響く 響く 春の 望の 峰に 歩をはこぶ 朝陽に染まりて
あぜ道が 鼻先に つめてく 楽しき 希望の 雲 朝陽に染まりて
道着を肩に あぜ道が 鼻先に つめてく 響く 春の 望の 峰に 歩をはこぶ 朝陽に染まりて
雀の聲（こえ）が 鼻先に つめてく 響く 春の 望の 峰に 歩をはこぶ 朝陽に染まりて
冬のつらきを 堪へてこ そ 楽しき 希望の 峰に 歩をはこぶ 朝陽に染まりて
われ等も苦練の ときを経て 希望の 峰に 歩をはこぶ 朝陽に染まりて
友と語りて 元気よく 歩をはこぶ 朝陽に染まりて
行く手の山の 峰の雲 朝陽に染まりて

編集係 M-松本ななみさん作の詩もご紹介させていただきます。さすが芸大生ですね。

寒稽古と言えは朝だ！と思いつつも、夜の部は日替わりで関西合気道競技連盟幹事の先生方（個人的な先生方）が指導を担当されるということで、興味をそそられました。残念ながら？！朝か夜のどちらかしから参加できないとのことだったので、朝の部に参加したのですが、週の後半になるにつれて気温も下がりが、体力もなくなり、もし、朝も夜も参加できていたなら・・・考えるだけでも恐ろしい。



第28回関西合気道競技大会

2003年11月23日 於 大阪市立阿倍野スポーツセンター



【自由演武競技】

[初級の部(無級~6級)]

- 優勝 永井仁高・清水真広(昭道館武蔵野)
- 2位 北野大輔・加藤悟(近畿大)
- 3位 マーク ルイス・益田知史(昭道館本部)
- 師範奨励賞 片山恵子・勝村純人(昭道館本部)

[中上級の部(5級~1級)]

- 優勝 松本朱音・森本良絵(昭道館本部)
- 2位 香取淳平・岩田眞雄(天理大)
- 3位 徳野恒子・中島浩子(昭道館武蔵野)
- 師範奨励賞 木下真理子・石本俊郎(大阪芸大)

[有段の部]

- 優勝 酒井進之介・香川太一(昭道館本部)
- 2位 大西美緒・萬谷久美子(昭道館本部)
- 3位 山口広治・濱野竜太(昭道館本部)
- 師範奨励賞 河村未来・赤木瑞枝(昭道館本部)

【種目別混合団体戦一安部杯】

- 優勝 昭道館本部選抜A
(松本朱音・森本良絵・ジャスティン ギャラガー・リー ハンナ・大西美緒・萬谷久美子・成山哲也・山口広治)
- 2位 天理大(竹原理子・久壽米敦子・香取淳平・岩田眞雄・佐藤大生・神永直哉・小山隆明・増田喜弘)
- 3位 昭道館武蔵野B(石垣司・舟戸千晶・中島恒久・黒見康春・山崎妙子・藤田絵美子・清水真広)

【種目別混合団体戦一内山杯】

- 優勝 昭道館本部選抜
(成山哲也・藤本和義・大西美緒・香川太一・キロン フェルトン・西井英二・木下大樹・河村未来・酒井進之介)
- 2位 関西選抜
(高江美智子・植田有香・松下悦子・伊達由美子・山口広治・今中哲平・中田重信・岩崎正人・山崎文加・東太樹)
- 3位 関東選抜
(小松正治・東政宏・山崎妙子・井上賀臣・鈴木真理・佐藤竜一・松原康祐・津崎善徳・藤田絵美子・小林卓)



- 【演武競技】
- 【男子対徒手】
- 優勝 大阪商業大学
- 2位 早稲田大学
- 3位 天理大学
- 【女子対徒手】
- 優勝 近畿大学
- 2位 成城大学
- 3位 大阪教育大学
- 【男子対武器】
- 優勝 関西学院大学
- 2位 天理大学
- 3位 大阪商業大学
- 【女子対武器】
- 優勝 関西学院大学
- 2位 関西福祉科学大学
- 3位 近畿大学

第23回関西学生合気道新人競技大会

2003年12月7日 於 住吉武道館

第6回 昭道杯

(短刀乱取個人定期戦)

2003年4月~12月 於 昭道館本部道場

- 【男子の部】
- 優勝 東太樹(大和会)
- 準優勝 上月修(本部)
- 技能賞 稲垣智浩(本部)
- 敢闘賞 酒井進之介(本部)
- 【女子の部】
- 優勝 大西美緒(本部)
- 準優勝 松下悦子(本部)
- 技能賞 河村未来(本部)
- 敢闘賞 赤木瑞枝(本部)

第1回関西少年合気道競技大会

2003年12月23日 於 昭道館本部道場

- 【午前の部】
- 【種目別混合団体戦】
- 優勝 光明池
- 2位 生駒
- 3位 向日町・北千里
- 【団体演武―コナミ杯】
- 優勝 新金岡
- 2位 生駒
- 3位 光明池
- 【師範奨励賞】
- 津村太郎(生駒)
- 辻太樹(光明池)
- 辻本宏輔(新金岡)
- 小路涼太(東岸和田)
- 山西瑤貴(向日町)
- 塩田亮(北千里)
- 【午後の部】
- 【種目別混合団体戦】
- 優勝 本部
- 2位 天理
- 3位 八尾
- 【団体演武―日刊スポーツ杯】
- 優勝 天理
- 2位 八尾
- 3位 本部
- 【師範奨励賞】
- 池田太樹(天理)
- 星澤由希子(八尾)
- 河内彰人(本部)



Dave's one point English corner

～ Twist my arm ～



合気道には数え切れないほどたくさんの方がいますが、共通して言えることは安全に稽古するべきであるということです。道場で稽古する時には、他の人をケガさせたり、自分自身がケガをしたりしないよう気を使わなくてはなりません。

この考えは何も道場に限ったことではありませんが、実は英語には「ケガをさせてもいい」という言い回しがあります。

道場の外で、誰かに「腕を捻ってください」と言う機会はほとんど無いと思います。でも、英語で話す時"Twist my arm"という表現をよく使います。

例えば、会社で仕事が山のように残っている状態の時に、友達に飲みに行こうと誘われたとします。行きたくてもこの目の前にある仕事の山を見ると行けないと思って誘いを断ります。それでもなお友達がしつこく誘ってくる。

この時に"Yes"と答えると自ら進んで"Yes"と言ったというニュアンスになってしまうので、そういう場合に"Twist my arm"と言います。そうすると、友達がもう一度誘って、そして"Yes"と言います。こうすると無理やりに行かされた感じになって、行くのが気楽になります。もちろん、言葉だけで、友達は1回も手を触れてないんですよ。

もう一つの例があります。

合気道の大会で演武をする前に、観客から選手が「足を折りなさい」と言われたら、大変失礼だと思わないですか？

日本語では考えられないことですが、英語では、この言い回しをよく使います。もちろん意味合いは全然ちがってきます。

昔、ニューヨークのブロードウェイで、ある俳優か歌手が舞台に立つ前に、他の俳優から励ましを受けました。"Good Luck"と。でも、この励ますための言葉が、逆に励ましてはなくなってしまった。Good Luckと聞くと、「どうしてLuckが必要なのか」とか「台詞を全部ちゃんと覚えているかな」という風に、逆に俳優たちに緊張を強いることになってしまった。なのでそう言われた俳優達が舞台に立つと、失敗が多かったらしいです。そんなことがあったので、それからは俳優たちを緊張させないために、舞台に出る前には、"Break a leg"と言って励ますようになりました。これは「足を折りなさい。」という意味ですが、俳優達がこれを聞いて緊張することはなかった。

現在は、ブロードウェイだけではなくて、一般の人達もこの表現をよく使います。

次の昇級・昇段審査では自分が怪我をしないように、また他の人に怪我をさせないように、がんばってください。皆さん、審査の前に足を折りなさい。そして、審査後に僕の腕を捻ったら、一緒に飲みに行くかもしれません。(妻には内緒!)



The interviews

--- Interview with member of Shodokan ---

今回のゲストはディビッド ウールコックさんです。彼はオーストラリアのメルボルン在住で、二人のお子様の名前は「なおき」と「たくみ」ちゃんです。1998年7月から2000年7月の2年間、昭道館本部道場で稽古し、昨年9月にも10日間ほど来日しています。

(W-ディビッド ウールコックさん

G-ディビッド グレブス)

- D: どれくらい合気道をしているのですか?
合気道をはじめたきっかけは?
- W: 合気道をはじめてから20年くらいかな。友達が勧められて始めたんだ。
- D: どれくらいの割合で稽古しているのですか?
- W: 2週間で3回、いつも3~6人で稽古しています。
- D: 合気道で何が一番楽しいですか?
- W: 技の形とか、運足の感覚かな。
- D: どうして日本で稽古しようと思ったのですか?
- W: もっと習いたかったのに、教わっていた先生が亡くなってしまったのです。そして日本人女性であるカズミと婚約していたこともあって日本で稽古しました。
- D: 近々また日本に来る予定はありますか?
- W: 来年、また行けるかもしれません。
- D: 新しく両親となった2人に対して稽古を続ける為のアドバイスはありますか?
- W: 稽古しすぎないことと、つくりと運足をしっかりと家ですること。相手無しで技の稽古をすること。
- D: ありがとうございます。

This issue's guest is David Woolcock of Melbourne, Australia. He is 43 years old, married and has two children, Naoki who is 3 and Takumi who is 1. He trained at the honbu dojo for 2 years from July 1998 to July 2000 and was recently back again last year in September for 10 days.

(DW:David Woolcock DG:David Graves)

- DG: So David, how long have you been studying Aikido and why did you start?
- DW: 20 years this december. It was recommended by a friend who thought I would like it.
- DG: How often do you train/teach and how many people are training with you.
- DW: 3 times every two weeks. Small classes of 3-6 people on a typical night
- DG: What do you enjoy about Aikido the most.
- DW: The form of the techniques and the feeling of the movement.
- DG: Why did you decide to come to train in Japan?
- DW: Our sensei passed away and I needed to learn some more. I was engaged to a Japanese woman-Kazumi.
- DG: Do you have any plans on coming back to Japan soon?
- DW: Maybe next year.
- DG: Do you have any advice for new parents trying to continue with their practice?
- DW: Don't practice so much, do tsukuri and movement practice at home. Do techniques without a partner.
- DG: Thank you very much.

A Lesson about Randori from the experience of Judo

By Alan Higgs

Tomiki sensei many times had mentioned that Aikido, especially the type that we practice at Shodokan, is the part of ancient Japanese budo that modern judo has left out of its randori and its shiai. This is because of the concern for safety by Kano sensei, Kodokan judo's famous founder. But Tomiki sensei had also mentioned that because of this, some of the essence of old budo was being lost as judo focused more on its mission as a sport. And of course as we know, the result of the efforts by Tomiki sensei to bring back that essence to judo as a sport, is our own aikido kyougi, the sport of aikido randori shiai.

Now as our own sport matures into an international game we face a similar challenge in Aikido randori shiai, "how not to sacrifice the essence of budo for tactics and techniques which merely satisfy the judgements of ippon, wazaari and yuko."

If we ignore the fact that as a player we throw an opponent for ippon and win but because of poor "tai sabaki" and ignoring "maai" we have placed ourselves in a position of potential danger from knife attacks or techniques of other budo or fighting methods, then our shiai would not pass the real life test of a real self defence situation. Therefore our

shiai would have no practical value as a budo and becomes merely a poor form of wrestling and we would be easily defeated by exponents of other forms of fighting.

In shiai, we are in essence testing our skills in a "real life" situation made safe by rules and judges. If we train ourselves in bad habits which may simply enable us to win a shiai, they most certainly will cause us injury or death in real life self defence.

So the attitude should be to analyse our shiai performance constantly from the point of view of "are we keeping to the basic principles embodied in our "kihon no renshu" where we develop our tai sabaki, maai (sense of safe distance), our own body balance and good upright posture (shisei), and our metsuke (to enable periferal vision for speedy reaction to the movement of an opponent) ?" If we keep those things in mind then our shiai experience will serve us well in self-defence and so keep the essence of Japanese budo in our sport.

The rubber knife actually has the spirit of a real one. Keep this in mind.



武道の本質を考えて乱取りをしよう

ヒングス アラン

古流柔術の中で、現代の柔道乱取に取り入れられなかった要素があります。それは講道館柔道の創始者である嘉納治五郎先生が、柔道を競技化するにあたって、安全性を考慮したがゆえに省略されたのです。富木謙治先生は、その省略された古流柔術の要素を復活させようと合気道競技を考案されました。それが我々が昭道館で稽古している合気道乱取競技です。

しかし、今や合気道競技は国際的な試合にまで発展し、「得点する為の作戦や技術によって武道の本質が犠牲にならないようにするにはどうすればよいか」という課題に直面しています。短刀の攻撃に対して危険な位置に立ち、攻撃をよけることなく技をかけるに行くという行為には、護身とは程遠いものがあります。試合というのは、安全性が考慮されたルールのもとで行う実践的な場です。単に勝つためにこうといった試合を行うということは、現実の場であれば負傷もしくは死を意味します。

「基本練習で培われる体捌き、間合い、姿勢、目付けといった基本原則を具現化しているだろうか」という視点から試合を見つめ直すことは大切です。そうすれば、試合経験は、護身や日本武道の本質を守り続けるために役立つことでしょう。

ソフト短刀でも、当たれば斬れる。という気持ちで稽古しましょう。



師範演武の図

いつも一瞬で、あつという間に終わってしまう美技。じっくり見たいという方のために、コマ送りでじっくりご覧いただけるように、挿絵にしました。

この挿絵は、本当に手間隙かけて作成しております。存分に味わって頂ければと思います。



Digest of events

The 28th Kansai Aikidokyogi Tournament

The 28th Kansai Aikidokyogi Tournament was held in the Osaka municipal Abeno sports centre on November 23, 2003. The number of players who entered exceeded 200, resulting in a very big tournament

The 1st Kansai Children's Tournament

The 1st Kansai Children's Aikidokyogi Tournament was held in December 2003 at Shodokan Honbu dojo.

A Children's division has been included in Kansai Aikidokyogi Tournament before.

But participants are increasing in number every year and the children's tournament was separated from the adult one and held at another time and place.

Kangeiko 2004 (Mid-winter training)

Kangeiko was carried out during a week late in January 2004 at Shodokan Honbu dojo. In the morning class, an average of 82 persons participated, in the evening class, an average of 26 persons participated, and the number of persons with perfect attendance was 51. An evening class was held for the first time this year, and the Kansai Aikidokyogi league standing managers took charge of instruction on a daily basis.

From the editors


To our readers. Every edition of this newsletter will contain an interview of someone within or outside the Honbu dojo. If you have any requests of people you'd like to know more about please let us know. We will also try to answer any questions you may have concerning Aikido waza by going directly to the source, the teachers, in this newsletter so again please let us know what you want to know. If you have any suggestions or ideas as to how to make this newsletter better or if you are interested in lending a hand your help is always welcomed.

Contact Kumiko Mantani, David Graves, Alan Higgs at shodoho@infoseek.jp.

We eagerly await your messages.



E-mail: shodoho@infoseek.jp
または、直接、昭道報係まで。
中村 芳勝(責任者)
山形 忍(編集長)
ビッグス アラン
グレブス デイビット
伊達 由美子
萬谷 久美子

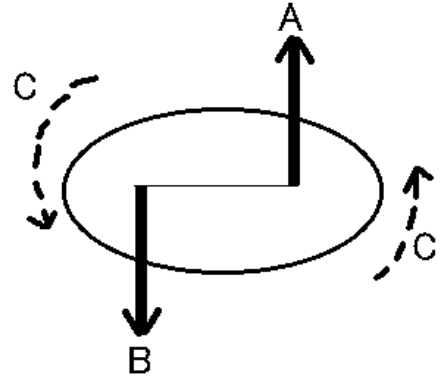

ちよいと
課外稽古

偶力って何？

Q. 技の解説を聴いていると、時々「偶力」(ぐうりょく)という言葉が出てきます。「偶力」とはいつたい何ですか？

A. ある物体に、作用線が一致しないで逆方向に作用する2つの力のことを偶力(ぐうりょく)といいます。基本的にはこの2つの力が同じ大きさの時に「偶力」という言葉を使います。この偶力は物体に回転運動を起こす働きをします。

下図で説明するとAとBが偶力で、この偶力によって物体(楕円形部分)がCの方向に回転します。



昭道杯

今年も関西合気道競技連盟審判部が主催する乱取り定期戦が開催されます。

昭道杯は審判員の質の向上と昭道館の一般稽古生に乱取り試合の経験の場を提供することを主な目的として年間五回に渡って開催されています。二〇〇三年度はその前年までの課題「不戦勝」「敗」が多すぎて実試合数が少ないを改善し、試合数が増えた分「対戦相手がいつも同じ」という新たな課題ができました。ほかの課題も含め、少しでも多く皆様のご要望にお応えしようと、改善した形で開催いたします。

三月後半には開催要項をご案内いたしますので、参加資格のある方は奮ってご参加ください。

編集後記

いつも英語記事と日本語記事の配置に悩みます。今回は、それぞれまとめたつもりが、よくみると混ぜこぜになっておりました。少々読みづらい部分もあるかと思いますが、お許しいただければと思います。英語の勉強だと思って、両方読んでみてください。

さて、安部隆宏指導員が永遠の旅に出發されてから一年が経とうとしています。皆様からお預かりした追悼文を第十号に掲載させて頂きました。校正の為とはいえ、熱くなる目頭を抑えながら何度も読み返すことが辛かったことを思い出します。

今後も皆様からの温かい想い、熱い想いなどを含め、いい内容をお届けしたいと思っております。

ご意見・ご感想をぜひお寄せください。お待ちしております。